蒼ざめた日曜日

曾野綾子

恐怖

蒼ざめた日曜日

曾野綾子恐怖小説集

桃源社

〈検印省略〉

蒼ざめた日曜日　定価一二〇〇円

著者　曾野綾子

昭和四十六年六月二十五日　発行

昭和五十二年四月十日　五刷

発行者　矢貴東司

印刷所　鎌倉印刷

発行所　東京都中央区日本橋浜町三丁目三十八番四号　株式会社　桃源社

(分) 0093 (製) 176166 (出) 5180

1977 ©

目

次

蒼ざめた日曜日

曾野綾子恐怖小説集

蒼ざめた日曜日……3
能面の家……35
二つの昇天……66
死魚の眼……99
消えない航跡……125
競　売……160
人生の定年……171

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

佳人薄命……203
長い暗い冬……233
飼育のたのしみ……244
人間の皮……257
百済観音……274
ナム・トク終点駅……288
ただよう小舟……301
解説　鶴羽伸子……331

蒼ざめた日曜日

曾野綾子恐怖小説集

蒼ざめた日曜日

第一話　鰐皮の財布を持つ男

彼はその朝、門のところで、ふと競馬に行ってみようと思い立った。

彼はここ三月ほど、失業していた。勤め先の会社で人員整理があったのである。仕事は全くない訳ではなかった。例えばタクシーやトラックの運転手とか、工場や学校の夜番とかならいくらでもあった。しかし彼も、人並みに出来るだけましなところへ勤めたい、と思っていた。彼ももう四十である。女房と子供が一人あった。子供をひとりしか生まなかったことは、こんな場合には幸運のようにみえたが、彼は生活力さえあれば子供は多いほどいいと思っていた。

彼は事務が好きだし、慎しいサラリーマン生活を愛していた。どうして彼は自分がクビになったかわからないのである。女房に言わせると、彼はお人好しで、何となく頼りない感じをひとに与えるのだそうだが、それ位のことで会社がクビにするものかどうかは甚だ疑問だ。

彼は町から大分離れた郊外に、小さな、ささやかな家庭を持っていた。ようやく一年前に、そこへ自分の家を建てたばかりである。子供のために無理して作ったブランコと、食卓ほどの面積の家庭菜園、それに鉢植の花が幾鉢かある。家族の外には、猫と犬が一匹ずつ。どちらもひどく血統の悪い、いわば純粋の雑種であるが、娘の愛玩物であるし、どちらも丈夫なので、彼は黙認していた。

彼の家の門のところから、右へ十分程も歩けば、町に入ってそこから都市に向かって電車が走っている。クビにならない前には、門から右へ行く通りは通い馴れた道だった。クビになってから後も、やはり職を探しに、彼は門を出ると右へ曲った。職は町か都市にしかない。彼が門を出ると右へ曲るのは、実験用のみみずの習慣と同じものである。

ところがその朝――朝と言っても、失業してからは職探しに知人の所を訪問するのが主だから、時間はずっと遅くなっていたが――門の前へ出てみると、自転車に乗った男も、トラックの背に合乗りした男たちも、テクで歩いている男も、皆、左の方へ流れるように進んで行くのである。一体、何が始まったのであろう。彼は驚いて人々の群を注目していたが、彼らの話をきくともなくきいていると、どうやら今日は日曜日で（彼はうっかりしてそれすらも忘れていたが）競馬があるらしい。そういえば、よく田舎競馬の開かれるちゃちな競馬場がこれから大分先へ行ったところにあるとは知っていたが、いつも早朝定刻に出かけてしまい、日曜日なら、時とすると昼過ぎまで寝ている彼は、こういう光景にぶつかったことがなかったのである。それに彼は賭事が嫌いであった。賭

ごとには何となく罪の匂いがするような気がした。そして賭事をしないということは、随分と美徳である筈なのに、それを妻が正当に評価しないのが彼は不服だった。女というものは、いい事は当り前で、悪いことばかり悪く思う図々しい動物なのだ。

それを思い知らせてやる為にも、一度位競馬に行ってみるか、と彼は思った。彼は人々の群について、門の前を左手に曲った。

空はよく晴れ渡って、美しい五月の太陽がほのぼのとした光を投げかけていた。彼はかなりのろのろ歩いたので、競馬場に着いたのは、人々の群の最後の方だった。

彼はまだ馬券を買おうか買うまいかと考えていた。馬のことは何も知らなかったし、どこをどう見て、勝馬を予想するのかもわからない。それに、いつ就職出来るかわからないとすれば、今持っている金はなけなしの金である。

馬券売場は、小さな建物であった。一棟は比較的新しく、白ペンキも綺麗であったが、他の小さな二棟は古くからあったものらしく、目下修理中で、風雨にさらされた羽目板はむき出しになっていて、以前には何色にぬられていたかもわからない位だった。

彼は出走馬の一覧表を買ったが、どこをどういう風に見るのかもよく知らなかった。彼は仕方なしに、今日は何日だったろうか、と考えた。今日は五月五日だった。すると5番以外の馬は買えないことになってしまう。彼は自分の誕生日のことも考えた。11月29日である。11も29も、馬の番号には見当らない。本命を買う気なら、人々が一番多くたかっている窓口で買えばいいのはわかり切っていたが、彼はぶらぶらと、馬の下見所の方へ歩いて行った。下見所と言ってもちっぽけな柵囲いである。

今日走る馬は、年が競馬馬としての盛りを過ぎていたり、血統もいい加減だったりするらしく、その故か素人目にも、何となく精悍な表情に欠けているように見えた。よく言えば馬達はのんきな表情をしていて、レース前に神経質になるような馬などはいそうになかった。馬丁がそれでもしきりに世話をしており、顔知りらしく、彼らに柵のこちら側から声をかける農家の青年もあった。

彼は大体馬というものを近くからしげしげと見たことがないのである。馬の表情からコンディッションを見わけることなど、彼にはとても出来なかった。それで彼は、馬と人間との関係を考え始めた。馬が人間に愛情を持っているかどうかという問題である。彼は持っていそうな気がしてたまらなかった。しかし彼の友人の一人は、その説を何かの折に否定したことがあった。

「馬と人間とは不倶戴天の敵だね」

友人はこう主張した。

「馬は優しい目つきをしている。蹄の手入なんかさせてる時には、殊に優しい眼つきをしてるぜ。しかしよく見てると、その眼つきはいわば愛想笑いなんだ。考えてみろよ。人間だ

って、他人に足の爪でも切らせてる時は、穏やかな顔をするよ。しかし馬は折あらば俺たち人間を蹴殺してやろうと思ってる。それはほんとなんだぜ」

もし友人の言葉が本当としたら、馬は嫌いな人間から餌を貰ったり、無理に走らされたりして、随分と気の毒なもんだな、と彼は思った。いやしかし、馬から見ると、下らないことに金を賭けて青くなったり、喜んだりしている人間が、随分と滑稽に思えるだろう。

彼がふと横を向いた時であった。彼はそこに何となく不思議な感じの男を見た。年輩は五十をちょっと過ぎているであろうか。よく見ればどこと言って変ったところはない。ひどく質のいい生地を、がっちりと一流の裁縫師の手にかけたような服を着ている。帽子も古びてはいるが上物らしくどことなく品があり、皮手袋にステッキを持っている。只、物腰の割には、彼の動作が意外に敏捷なのが、気になるといえばいえる。

男は右手の小指に、黒い趣味のいい指輪をはめていた。その手が、又男の手とは思えないほど、デリケートな、器用そうな感じである。

男が馬券売場の方へ歩き出したので、何気なく彼もそれについて行った。その男、いや紳士は、両替という札の出ている窓口まで来ると、内ポケットから立派な鰐皮の財布を出して、中から最高額の紙幣を一枚引き出した。その時偶然、彼は男の横に立っていて、その財布の中身を見てしまうハメになった。中には札が一枚しか入っていなかった。もっとも札といっても、彼の持っているような札とは額が違う。けれど一枚札を引き出すと後はカラッポという状態が、ひどく物淋しく貧しげにみえるのはどういうものだろう。こういう紳士は札束で財布をふくらませているものとこちらは決めてかかっているので、そういう奇異な感じがするのだろうか。

しかし何ということもなく、彼は紳士につき従って行った。

紳士は、白ペンキ塗りの新しい馬券売場の前をゆっくりと横切り、6—3としるされた連勝式の窓口で何枚か馬券を買った。人々は他の窓口に群がっており、6—3の窓はガランとしている。もし当れば、穴、それも多分大穴になるのだろう。彼はためらったが、次の瞬間には、紳士の真似をして、彼も同じ6—3を一枚買った。純粋に紳士のマネをしただけの話である。

その時、紳士は、彼が自分の後にくっついて歩いていることに気がついたらしかった。彼はふり返って、いささか剽軽な、ふさふさとした眉毛の下から、心もち眼尻の下った人の好さそうな目つきで、彼に微笑を向けたが、彼の方は慌てて視線を避けてしまった。

それは第二レースであった。馬は何回か後退して出直した挙句に、ようやくスタート・ラインに並び、一せいに土埃をあげて走り始めた。彼は人々の興奮した波におされて、いつの間にか紳士のすぐ後に立っていた。彼は背が低かったので、先頭の馬の番号や、騎手の帽子の色を見分けるのも容易なことではなかった。あっという間にもう勝負は決定したらしく、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

人々の間には或る不思議などよめきがまきおこった。
「おかしいな、全然。セント・オーガスティンはどうしたんだ。てんで駄目じゃないか」
「穴だぜ、これは」
アナウンスがおこった。
一着は6番、二着は3番である。本命のセント・オーガスティンはようやく四番であった。数分後には配当金が発表された。
彼は夢心地であった。一枚の馬券が、その三十四倍程になったのだ。彼はカンニングをした生徒のようにこそこそと例の紳士の視線から逃れ去るように出て行った。彼は真先に配当金を受けとり、それから馬券売場の一隅に生えている樫の木の傍に半ば身をかくすようにして煙草を吸った。紳士はゆっくりとスタンドから出て来ると、金の払戻しを受け、そのままもう一度馬の下見所へ行った。それで彼もあわてて下見所へ行き、馬ではなく紳士の方ばかり横目で見ていた。今度は紳士は堪能するほど馬を見たのに馬券を買わなかった。何となく、彼は二番のヴィクトリーが勝ちそうな気がしていたが、紳士が買わないのに自信を失って、その儘やはり買わずじまいで、紳士の後にくっついてスタンドに戻った。
もう一度同じようにして馬が並び、やがて走り出した。今度は彼は馬の走るのにつれて、中央の麦畑がさわさわとそよぐのを落ちついてみていた。麦たちは、馬が走るので困惑しているようだった。馬が決勝点に入った時、ヴィクトリーは五着であった。
第四レースでは、紳士はためらわずに、本命の予想通り1—2を買った。この二頭の人気は決定的なものらしく、人々は争って同じ窓口に殺到した。彼も今度は勇気を出して、十枚の馬券を買った。そして買い終ると彼は又もや見えがくれに、例の紳士について歩き出した。今度は、紳士はそれに気づいて彼を見逃さなかった。紳士は彼が否応なく、歩み寄って来るのを待ちかまえた。
「どうして私の後にばかりついて歩くんです?」
紳士は用心して苦笑いをしながら言った。
「何でもないです。只何となく。つまりあなたの買うのを買うと当ったんです。私は競馬をよく知りません」
彼はとつとつと、苦しそうに言い訳をした。
「それなら結構です。私を信じて下さるという方にめぐり会うのは大変愉快だ。一緒にレースを御覧下さい」
紳士は全く紳士的だった。
「今度はいかがです?」
「まず、我々も買った1—2の順序に間違いありませんな」
「どうしておわかりになるのです?」
彼は次第に気を許して、紳士に尋ねた。
「あなた、世の中には女に会った瞬間に、もうこの女は自分に惚れるだろう、ということがわかる時があるじゃありませんか」
紳士は何気なく言った。

「そうですとも、そうですとも」
それから彼は大変愉快になったので、大声をあげて笑い出した。その時、第四レースはスタートした。
まき上った砂塵のあおりをくらって、スタンドの方にも、埃が降って来たが、彼は夢中だった。彼が叫ぶごとに、一番のシルバー・アロウも、二番のフェルナンデュールも、小気味よいほど、ぐんぐん足をのばした。ゴールに入った時、二着馬と三着馬との間は四馬身程も離れていた。「いいぞ、いいぞ」彼は思わず叫んだ。そして隣の紳士をふり返った。紳士はいつの間にか人々の興奮をよそに、ベンチに坐りこんでいた。
「つまらん勝負でしたな。こういうレースには波瀾がなくて全く面白くない」
「おかげさまで儲けさして頂きました。今度はどれをお買いになります?」
彼は紳士の憂鬱そうな表情など目にもとめずに上機嫌で言った。
「まだわかりません。買うかもしれないし、買わないかも知れない」
「お願いです。又今度も教えて下さい」
そう言ってから、彼はさすがに喜びのあまり逆上した自分が浅ましくなって来た。
「すみませんでした。私は今失業中なのです。今日のように金が入って来ると嬉しくてたまらないので、つい軽率なことを言ってしまいました。しかしあなたは凄い方だ。あなたのような人は、失業もしないだろうし、どんなに商売もうまく当るでしょう。ときに、失礼でなかったら、あなたの御商売を伺わせて下さい」
二人は又、つれ立ってスタンドを下りて行くところだった。
「商売の話ですか」
紳士はひどく当惑したように言った。
「こういう所で商売の話はいけませんな。運の神様が逃げてしまいます。私は或るものを持って歩いてさばいて行くのが仕事なのです。その品物の話などうっかりすると、私はあなたにまでそれを押しつけたくなるかもしれない。こういう所で、それはまずいですな」
紳士はもう一度くり返した。
「いや私は、あなたがさぞかし腕のいい商売人でいらっしゃるだろう、と思うのです。それに比べると、私は全く能なしです」
彼は実感をこめて言った。
「いやそれはとんでもない。あなたの買いかぶりです。私は、その品物を沢山持って歩いて、うんと商売をすればいいのだが、いつも大てい一つだけ。あとはもうさぼって、遊んでいます。その一つだけは、これと目やすをつけた所で売り損うことはありません。しかし私は怠け者ですのでね」
「いや、一つしか商売をしないとおっしゃってもあなたの御商売は大きな御商売なのでしょう。私が貰っていた一月分の

サラリー、いやそれ以上もの金が一ぺんに入って来るような」
「まあ、そうかもしれませんな」
紳士の顎は綺麗に剃られているにも拘らず、彼は不安定な面持をしながら、髭が残っていはしないかと気にしてでもいるように、しきりに撫でまわした。
二人は、金を受け取ってから下見所の方へ歩き出した。今度は一枚あたり、三・五倍ほどのもうけにしかならなかったが、それでも彼は窓口から金を受けとる時は、思わず手がふるえた位であった。
「どうです」
下見所の柵によりかかって馬を見ている紳士に、待ち切れなくなって彼は尋ねた。
「わからないですな。私は5—4と買おうと思うが、自信を持ってあなたにおすすめは出来ません」
「私も5—4を買います。あなたのなさる通りにします！」
彼はもう完全に彼の信者だった。彼は又、十枚の馬券を買った。
「今度はちょっとしたスリルですな」
「当ります。きっと当ります」
彼はもう何も見えず、自分の心臓の鼓動しか聞こえなかった。
二人がスタンドに戻ると間もなく、馬は一塊になって走り出した。彼は馬の歩調に合わせて、荒い短い息づかいをした。
3番の本命、ウッドコックが先頭を切っていた。続くのは4番ゼヒャーと5番のスパルビーンである。走る置物のように、その順序と馬の間隔は、微動だにしないように見えた。
「やっつけろ！」彼はどなった。「そこだ！ そこで追いこすんだ」何もわからない癖に彼は夢中だった。最後のコーナーを廻った頃、ウッドコックの足が少し鈍ったようにみえた。直線コースにかかると、スパルビーンがじりじりとウッドコックの肩に迫り、やがて首一つの差で前へぬけた。ゼヒャーは、ぴったりとスパルビーンにくっついていた。三頭の馬は、一団になってゴールにとびこんだ。結果は真横から見ない限りわからなかった。彼は足ぶみを始めた。
アナウンスが始まった。一着は5番スパルビーン、二着は4番ゼヒャーである。
彼は隣の紳士に礼を言おうと思ったが喉がからからに乾き切って声は出て来なかった。しかし、その次の瞬間、彼はもっと驚くべき光景を見た。
隣の紳士は、二人の男にがっしりと両脇をはさまれていた。男たちは人相が悪く、目立たない服装をしていた。
「×署のものです」
一人が上着の内ポケットから、何か手帳のようなものを出して、紳士に示した。
「署まで同行して下さい」
もう一人が言った。
「私が何かしたのでしょうか」

紳士は落ちついて、慰慰にきき返した。
「偽造紙幣があんたの手から支払われたのがわかったんでね。両替所の女性があんたの小指の指輪を覚えていて、それを目印に今迄探したんだよ」
紳士の顔に微かに血の色が泛び、刑事の顔は平静で声は低かった。それは名優の演技のようだった。
その時、場内アナウンスは、配当金を発表した。そして湧きかえる失望と落胆のどよめきの中を紳士は二人の男と腕を組んだ形で、ひかれて行くところであった。
「あなた！　金を受けとることはもう出来ないんですか？」
彼は紳士にとりすがった。
「心配しないで下さい。又もうけなおしに来ますよ。これ位のこと」
「この次は最後のレースです。どうかもう一度教えて下さい」
彼は執拗に呼びかけた。刑事の背中は巨大な岩のようにみえた。
「わからないですな。関がないのでね」
紳士は引き立てられて歩きながら、哀れむように彼の方をふり返って言った。
「9番だけならわかっています。その次は見当もつかない。9番の単勝をお買いなさい」
「黙って！」
刑事は紳士を制した。今や紳士はもはや紳士ではなかった。男は紙幣偽造団の一味だった。商売の話も恐らくは、偽造紙幣を町に流す方法を話していたものに違いない。
彼は5—4の連勝でもうけた金を払い戻してもらうと、夢うつつで、今迄にかつて握ったこともない程の大金を両方のズボンのポケットに固く掴みながら歩き出した。今までにもうけたこれだけの金ですら、二三ヵ月は楽に暮らすことが出来る。就職は彼の意識から、遠くに離れ去っていた。最後のチャンスで、もう一もうけするのだ。今度は全部賭けてやる。もし当れば、二三ヵ月暮らせるどころではない。何か小さな商売をやる資本ぐらいは出来るかもしれないのだ。
その時、彼の行手にちょっとした事件がおこった。
長い材木をかついで来た一人の男が修理中の古ぼけた馬券売場の前で方向をかえようとした時に、あやまってその材木の一端を、窓口の一つにつっこんでしまったのである。窓ガラスが飛び散り、中で馬券を売っていた人間も吃驚したらしく、材木をかついでいる男を、荒々しく叱りつける声も響いて来た。
窓口からタオルをつかんだ腕がにゅっとのびて、出札口のガラスの破片はすばやく払い落され、落ちた番号札も元通りかけられて騒ぎは一応おさまったかのようだった。
ふとみるとそこが9番の売場だった。彼はそこで有金全部を渡した。そして分厚い馬券の束を受けとると、数を数えてもみずに、ポケットにしまいこんだ。
彼は目を伏せて、足早にそこを立ち去った。9番の単を買

う人間が少しでも少ない方がいいのだから、注意をひいてはいけないのだ。彼がそれほどの大金を賭けたことを見ると、これは何かよい情報があるか、或いは八百長の手筈でも決まっているかと臆測した他の人間が真似をして9番を買うかもしれないのだ。恰度彼が何となく、あの〝紳士〟の真似をしたように。

彼は人々が1番の前の窓口にたかっているのを小気味よく思いながら通りすぎた。9番は記録の悪い馬という定評があるらしかった。

これほどの苛立ちを、彼は生涯に覚えたことはなかった。9番が勝つためになら、彼は神に祈ってもいいと思い、事実彼は祈り始めた。

馬は出発点に集っていたが、いつ迄経っても、一列に並ぼうとはしなかった。二度、三度、四度までやりなおして、遂にスターターはしびれを切らしたようだった。五回目に、やはり馬はきちんと並んでいなかったが、スターターは出走合図の赤旗をふり下してしまった。

彼は唸った。彼は自分の耳をつかみ、それを指先でふるわした。どうしてそういう動作をするのかわからなかったが、それが一番楽なのである。9番はパライデラで、先頭を走っていた。そのうちに他の馬が抜くだろうという気持で観衆は割合静かであった。

馬はそのままの形勢で最後のコーナーを廻って直線コースに入っていた。彼は目をつぶり、人々のどよめきだけをきいた。命の縮まる思いだった。

「9番だ！　パライデラだ！」

呟きがあちこちから聞こえた。

彼は、頭を下げて、遂に金をそっくりすってしまったかのような様子で、人々の群について歩き始めた。彼は幸福か不幸かわからなかった。彼は興奮してよだれを靴の上に落してしまった。

彼は払戻所に行って、窓口から、トランプのカードのようにつみ重ねた馬券を出した。

ぼさぼさの髪をした女の顔が中から彼を見上げた。

「何ですか、これ？」

「当り馬券だよ」

「一着は9番ですよ。あなたのは、みんな6じゃないの」

彼は慌てて馬券を見た。それは6であった！

「9番の窓口で買ったんだ、嘘じゃない！」

彼は窓口に噛みつきそうにしながら叫んだ。

「私に言ったってしようがないわよ。それにこっちは間違えることなんかある筈ないじゃないの。ちゃんと6番から6番の券ばかり売ってるんだから」

女はそばかすだらけの顔に、白眼をむいて言った。

「なにを！　このかたり。俺はちゃんと9番の窓口で買ったんだぞ！」

「救けて！　乱暴を働くんだよ！　この男！」

彼は窓口から手をさし入れて、引きぬいてやりたいような

烈しい憤怒にかられながらそばかすの女の手を引っぱった。女の叫び声があたりに拡がり、人々が走り寄って来た。先刻、〝紳士〟を連行した二人の刑事もかけつけた。彼らは彼から事情をききとると、すぐ問題の馬券売場へと一塊になって進んで行った。

「ここでは6番の馬券しかとり扱っていないんだろうね」

刑事は尋ねた。

「はあ」

窓口の中からは老人の嗄れた声がした。

「9番の番号札を出したことはあるかね？」

「いいえ、ここは今朝からずっと、6番です」

「うそをつけ！　先刻は9番の札を出していたじゃないか」

「あんたはさっきのニセ札使いの男に、最終レースの予想を根ほり葉ほりきいていたじゃないか。何かあの男と関係あるの？」

刑事の一人が言った。

「とにかく、番号の違う馬券を持ってて、文句を言っても仕方がないね。あんたの他には誰も、あそこに9番の札がかかっていて、それで買い間違えた、という人がいないんだから」

「あ！　俺がまちがえたよ！」

と群集の中からヤジる声があったが、それはチンピラの悪戯だったので、刑事に一睨みされると、驚いてどこかへ消えてしまった。

「あいつ随分買いやがったな！」

「あんなに買っちゃ、頭に来るのも道理さ」

「しかし図々しいな」

そんな囁きも聞こえた。

幕が、どこからともなく灰色の幕が、目の前に下りて来るような感じだった。彼は目を閉じ、そして一筋の涙が、その痩せた頬に伝った。

「明日から又、仕事を探そう」

彼は心の中で呟いた。

「ニセ札使いのおかげでもうけた金だったからな」

その頃、問題の6番の馬券売場の中では、ひそひそと、小さな囁きが交されていた。それは例の嗄れた声の主の老人と、その孫娘であった。老人は両親を失った孫娘を自分の手で育てていた。そして今日は日曜日だったので、彼女は祖父の手伝いかたがた遊びに来たところであった。

「お祖父ちゃん、どうしよう。材木で窓がこわされて、番号札をかける時、ついうっかり間違えて9の札を拾っちゃったのよ」

彼女の言う通り、足許には1から9までのさまざまな番号札がちらかっていた。材木で6の札がはねとばされてその中に落ちた時、彼女は気をきかして、素早く6を拾ったつもりで間違って9の札をかけたのである。数十秒後、気がついた時には、既に一人の男が大量の馬券を買って帰った後であっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.